
異界への亀裂

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界への亀裂

【Nコード】

N8876E

【作者名】

i m a i w a

【あらすじ】

平凡な高校生が、ある日山で黒い亀裂をみつけた。どうしようかな。

俺は森巖幸之助。

いわゆる、巷でいう高校生2年生だ。

もちろん男。

ある日俺がある山へ登山へ出かけたとき、雑草が生い茂るちょっとした広場へ出たんだ。

青い空白い雲、まー天気はいいよ。

ゆったりとしてとてもいい。

広場に設置されたベンチに腰掛け、背もたれに体を逸らせ頭を後方に垂らす。

ん？ あれ何だろう？

頭をうな垂れすぎて、後方の景色が上下逆さまになっていたが

何か後ろの藪の中に黒い亀裂のようなものが、草むらより下に浮いた辺りに

縦に入っているのが見える。

俺はそれをその姿勢のまま、眺めていた。

いや観察していたと言った方がいいだろう。

黒い亀裂の中は一見真っ暗で何も見えない。

しかしこれは……

良く小説などに出てくる異界への入り口とかではないだろうか？

そんな思いつきが頭に浮ぶと、俺の好奇心が活動を活発にし始める。

そうだ、それだよ。

あの空間の向こうには、何かあるに違いない。

良く分からない建物や、モンスターなどがいるんだよ。

もしくは、異次元の住人。

いや、宇宙人がいたりして、別の惑星に繋がってるのか……？

様々な説を頭に打ち立てるが、所詮あの中に入ってみないとそれは空想でしかない結論付ける。

さて、どうしようか……。

取りあえず、近くまで寄ってみようか。

足を強く踏ん張り、その反動で勢いよく立ち上がる。

うな垂れすぎていたせい、首が痛い。

頭に血が上っていたせいで、立ち上がったときふら付きも起きた。

そんな諸症状を抑え込み、体をその亀裂の前まで移動させた。

うーん……。

その亀裂から1Mほど距離をとって穴が開くほど見つめてみた。

穴は開いているけど……。

亀裂の裏側に回ってみた。

後ろから見ても黒い亀裂が同じ姿で眼に映る。

やっぱりこれは……、亀裂だ。

空間にどういうわけか、ぽっかり空いている。

……………。

さてどうしようか？

良くあるパターンでは、この中に突然吸い込まれたり

自分から身を投じる無謀な行いをしてみたり

間違っただけで、事故的に入ってしまったという展開が

一般的だ。

いやー、しかし俺の場合、別に現実世界に不満があるわけでもないし

未知の世界に飛び込みたいという気分も起きてこない。

そして予め見つけたおかげで、事故にもあわずに済んでいる。

吸い込まれる様子もない。

この中に入る道理は一切無いわけだ。

それに中に入れるかだって怪しい。

亀裂にふれたとたん、体が粉碎される事だって考えられる。

そんなイメージを頭に思い浮かべているうちに

だんだん、これがとても危険な物に思えてきた……。

その場にしゃがんで、じーっとその亀裂を凝視する。

うーむ……。

ん……？

俺が見つめている前でとんでもない事が起きた……。

少し真ん中付近が、横に広がったかと思うと

人間の手のような物が出てくる。

その手には何かが入ったビニールの袋が握り締められていた。

白く長い手はそれを手放したかと思うと、こちらの世界の地へそれを置いた。

いや、捨てたといった方がいいのかもしれない。

その行為が終わると、手はまた亀裂の中へゆっくり消えていく。

……………。

なんだ……？

俺は亀裂に消えていった手も気になっていたが

それ以上に亀裂の傍に落ちているビニールの中身に興味が行っていた。

何が入ってるんだろう……？

ビニール袋の前まで近寄ってみた。

この行動も良く考えれば、危険な行いだとは分かっている。

そのビニールの中身が有害物質であったならば、近くに毒ガスを撒き散らしているかもしれない。

俺がその毒ガスを吸ってしまえば、一瞬にしてあの世へ飛ばされる事になるだろう。

しかし、そうなくても仕方ない　とは思えないが、向こう見ずさがその不安を凌駕し

危険な行為へと走らせる。

さて、どうするか……？

取りあえず、中がすごく気になる……。

しかし、直接手で触るのはさすがに出来ないな。

俺は周りに視線を巡らすと、草むらの中に木の枝を発見した。

うん、ちょうど、俺の手の長さくらいある枝だ。

これを使って、あれの中身を穿り出してみるか……。

その枝を握ると、息を呑みながらビニールに近づけるが中々思い切りがつかない。

触れる瞬間になると、思わず後ろに引いてしまう。

怖い……。

ここまでやってるんだ。

中を見ないわけにはいかないだろ？

自分に言い聞かしてみる。

もう一度トライだ。

とりあえず、千里の道も一歩からだ……。

まずつついてみよう。

ツン……ツン……

ふー、突付いたぞ……。

特に何も動く様子は無いな。

袋の中から音も聞こえてこない。

という事は、中にわけのわからない生物はいないって事か。

もう少し大胆になってみよう。

俺はビニールの結び目あたりに木の先を差し込んでみた。

そして、そのまま宙に軽く持ち上げてみる。

揺らしてみた。

ガラガラ……。

なんだ、この缶詰が揺れるような音は。

それをゆっくり地に置いた。

差し込んだ木を右へとずらし、内部の物を思い切って覗いてみることにした。

やっぱり缶詰！

それも何個も入ってるよ。

缶詰の側面には魚のマークが…。

×株式会社とまで書かれている。

なんだよ、ゴミかよ……。

意外と亀裂の中の人も俺と同じような人間なのかもな。

ふー、ちよつと緊張して損したな。

でもよ、亀裂の中にいるのだから、やっぱり普通じゃないよな。

普通に見せかけといて、中へ入ると目球が10個くらいあって

手が3本くらいある怪物だってこともあるかもしれない。

中にお邪魔しようかと思ったけど、それは辞めところ。

しかし、この亀裂のまま放置していいものだろうか？

いや、俺の知った事じゃないんだけど、目撃しておいてほったらかすのも

何か気が引ける。

埋める……？

いや、それは無理かもしれない、空中に浮いてるし、大きさもかなりあるから

ダンプカーで砂を積んでも来ない限りそれは不可能に近い。

じゃあ、どうにもできないよな。

やっぱりこのまま去るか……？

それもいいけど、せつかく見つけたのに何もせず帰るってつまんないな……。

よし、石を沢山集めて、あの中へ投げ入れてみよう。

俺はそう決めると、ここへ来る途中で岩の斜面があつて

その下に小石がいくつか落ちてたのを思い出した。

あれ拾つてこよう……。

俺は亀裂を置いて、その場から走り去る。

うんしょ、うんしょ……。

取りあえず手いっぱい石を抱え込み、亀裂の場所へ帰ってきた。よし一度に投げるぞ、二度目はない。

なぜなら、投げた瞬間逃げるつもりだからだ。

ピンポンダッシュの要領だ。

しかしそれには袋が必要だな。

さっきの袋……。

それは辞めとこう……あれはまだまだ解析が足りない。

俺は持つて来たリュックサックからビニール袋を取り出す。

その中にありつたけの石を詰め込む。

よし準備完了！

ビニールの口を結んで、少し大きめの輪を作る。

それを手に持ち、亀裂から3M付近の位置に立った。

ここが俺のコントロールが役目を果たすギリギリの距離だと思ったからだ。

じゃあ、あの穴に向って投げ込むぞ！！

いち……にい……のお……さん！！

ファイア……！

袋をアンダースローの投げ方で、下から丁寧に反動をつけて

穴目掛けて投げ込んだ……。

緩いカーブを描いて、そのビニール袋が亀裂の中へと吸い込まれた。

それと同時に、ダッシュ……！！

後ろから、「イタイ誰だ……！！」って大きな声が聞こえたが

振り返らない。

だけど、やっぱり人間がいたんだ。

ハハ、何者だろ？まあ俺は逃げ切った……。

君子危うきに近寄らずだ……。

さてと山を降りるか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8876e/>

異界への亀裂

2010年12月14日14時52分発行